

【ねがいましては】

令和5年8月17日

KYOWA SCHOOL

第396号

「今、しあわせですか」

2023年8月17日読売新聞社説です。「つらさを受け止め寄り添って」子どもの自殺についての記事になります。そろそろ夏休みも終わりが近づいてくると、必ず話題に上がる「子どもの自殺」。

毎年8月末になると繰り返し取り上げられる記事です。で、社会（教育界）は何か変わったのか？

社説内にある自殺増加の原因は次の2点を掲げます。コロナ禍に入った2020年以降、日常生活の制限からくる「ストレス」や「勉強の遅れ」などが背景にあるとされる、とあります。

コロナ感染症が5類に引き下げられ、学校生活が以前の日常へと戻りつつある中、この2点は改善へ向かっているはずですが、それでもなぜ社説は取り上げるのでしょうか。おそらく、コロナ禍があるなしにかかわらず、この長期の休みが終わるころの子どもの自殺発生については常態化しており、なんら効果のある対策がなされていないことに論点を置いているような気がします。先ほど2点を掲げていると書きましたが、何か釈然としない「何か」が私の中に漂います。そうなんです。「またあの子と会わなければならない・・・。」つまり人間関係です。日、一日と近づいてくる新学期、子どもたちのころころには、ある物語が展開されます。過去の情景です。あの聞きたくない「ことば」・・・。されたくない「チョッカイ」などなど、いやなことばかりが脳裏に浮かびます。そして「行きたくない・・・。」

社説内の自殺防止方法としては、身近にいる大人が子どもの日常の様子にきめ細かく目を配ることが需要だとしています。不眠や食欲不振など、ささいな変化に気づいたら「どうしたの」と声をかけてほしい。本人の話に耳を傾けることが大切だと書いています。

ここで疑問に思うことが、社説は「教育環境」（制度）という土台については何ら疑問を抱くことなく、子どもの変化のみに目を向け、そこに解決の糸口を見出そうとしていることです。社会（学校）とはそういうもの、私たち大人たちもそのような社会（学校）で育ってきたのだから・・・。私はそこに最大の問題点が隠されていると感じています。

自殺という具体的行動に至った子どもたちだけではなく、それに近いギリギリのところまで食いどまりながら日々を送っている子どもたちは相当数いるのではないかと思います。その子たちは日々真剣に苦しみながら、どん底の感情のなかに身を置きながら生活していることを思うといたたまれないものがあります。

私は「学校の在り方」そのものを再検証することこそが子どもたちが救われる唯一の方法だと思っています。

例えば、学校へ行かずに自らが選択した「学び場所」で専心するのであれば、堂々と社会（学校側も含めて）は、そのような子どもたちにエールを贈るべきです。つまり、社会全体が「学校ってところはな、行きたくなければ行かなくていいんだぞ、学校以外で学びたいことがあれば、堂々とそちらで学ぶがいい・・・。」というムードをかかえること。そうすればかなりの子どもたちを救えるような気がいたします。今、それを実行に移すと多くの子どもたちは既存の学校へは行かなくなるかもしれません。なぜなら「テスト」「評価」「競争」が待っているからです。テストが好きな子どもは極少数でしょう。順位にワクワクする子供たちも少数でしょう。なぜ、学びに数値的評価があるのか・・・。

これは大人たちの「エゴ」に過ぎないと思います。将来、企業戦士として経済大国日本を維持するための人材育成に使用するための指標です。一握りの成功者を生み出すための「エゴ」なのです。それで出来上がった語彙が「学歴社会」。

先生方についても同じことが言えます。「指導要領通りに遅れないよう教えなければ」という義務感を廃止し、子ども一人ひとりの「こころの状態」に最大限関心を置き接することが真の教育と捉え、将来に向かって力強く生き抜こうとする「くじけないこころ」「粘り強いこころ」づくりに尽力することが大切だと思います。それには多くの方々の思いやりや優しさをいただくということを子どもたちに伝えます。やがて子どもたちの明るい表情が優先される学校社会が構築されれば、きっと社会も今までにない生き生きとした子どもたちを見、「これが学校だよ」と認めてくれるでしょう。そして「先生」になりたい方々も増え、登校拒否も激減するでしょう。

日頃、多くのメディアに触れがちな子どもたちは、常に「勝者」ばかりを見がちです。「ぼくもああになりたい」「わたしもああになりたい」と、将来に夢を馳せることは大切なことだと思いますが、その勝利や成功の裏には数えきれないほどの失敗や挫折が含まれていることを伝えるのも「学校」の役割だと思います。一つの成功のために100以上の挑戦や失敗、長時間にわたる地道な努力の積み重ねなど、本来はご家庭がその役割を担っているのかもしれませんが、しかしご両親共お勤めされている方が圧倒的に多い現代、お子さんとの触れ合いの重要性を自覚されていながらも、なかなか子との時間を持たない歯がゆさを感じていらっしゃることでしょう。

テストや評価は、子どもたちから徐々に「信頼感情」を削り取っていきます。「勝ち負け」という、勝利至上主義が、となりの子との「信頼感情」を希薄なものにしていきます。本来「教育」とは、「ひと」を作る場所です。「ひと」とは、「助け合う生き物」「支えあう生き物」であるはずですが。

人類の長い歴史の中で確実にわかったこと・・・この地球上で唯一「殺しあう生物」・・・それが「ひと」です。

せめて子ども時代で結構です。学校をいじめのない助け合う場所にしましょう。「ひと」を育てましょう。